

開催地名：愛知県みよし市	
開催日時	令和2年11月15日（日） 10：00～11：30
開催場所	みよし市役所
語り部	高橋 進一 （千葉県旭市）
参加者	みよし市消防団員 約70名
開催経緯	近年、本市では大きな災害が発生しておらず、消防団員の災害時の役割や活動に不明確な部分があること、団員の災害への危機意識が低く、それに伴い防災意識も低下していることが懸念されている。今回語り部の講演会を開催してお話を伺うことで、団員の意識の向上を図りたい。
内容	<p>（1）震災発生時の被害状況</p> <p>千葉県旭市では、地震発生からおよそ2時間半後、最大の津波が押し寄せた。津波は堤防を越え、町を大きく飲み込んでいった。多くの人たちが一時避難所に避難した。停電や断水が続く中で、余震も継続して発生し、住民は寒さの中で不安な夜を過ごした。津波以外にも道路の陥没や地割れ、家屋の半壊や屋根瓦の落下など、多くの被害が発生した。さらに、液状化でも大きな被害が発生した。地盤が一旦液状化したところでは、二次災害の恐れが大きいと言われている。旭市の被害状況は死者14人、行方不明者2人で、住宅被害は3,827世帯に及んだ。住宅被害のうち、床上浸水が677世帯、床下浸水が277世帯、液状化774世帯、特に被害の大きかった飯岡地区では、この他に津波による建物の倒壊等で道路が通行不能になったり、漁船が転覆する等の被害を受けた。</p> <p>（2）震災を振り返る</p> <p>東日本大震災発災時、自分がどう行動すべきなのかわからず、知識はあっても、最低限の備えはしていても、結局は何もない状態からの対応となったことは否めない。事前に準備・想定していた町内会単位での避難はできず、近隣の数世帯ごと、家族単位、個人単位での避難がほとんどであった。これが現実である。</p> <p>各避難所では、飲食料品をはじめ毛布などの備蓄品を用意していたが、食料が不足したため市はコメ7俵を追加で拠出し、おにぎりにして各避難所に配った。だが、用意された炊きだしは、全員に行き渡らなかったと思う。</p> <p>避難所開設にあたっては、自治体職員を主に、社会福祉協議会等の公的機関が中心となって対応した。緊急時の連絡網を持っている赤十字奉仕団の始動も早かったと思う。一方で、旭市には153地区に町内会があったが、残念ながらあまり機能しなかった。会員と連絡がとれなかったのである。民生委員のなかには避難所に駆けつけた人もいたが、私には連絡が入らなかった。この点についても今後の課題だと考えている。</p>

	<p>(3) 震災を経験して</p> <p>過去の災害から学ぶという姿勢は大切だと思う。その意味で、過去に起こった災害について、今一度見直してみることも必要であろう。今から 300 年前に、元禄大地震があった。その際に、大津波があり、現在の千葉、東京、神奈川の海岸沿いの地域では、5,000 名以上の方が亡くなったと言われている。この出来事を知っているのは一部の郷土史研究家だけであり、学校でも教えられていない。元禄大地震後、大きな災害がなかったため、津波の被害を受けた地域では安全の町であると考えられてきた。しかし、近頃、自然災害が頻発しているため絶対安全とは言いきれない。自分の住む町がどのような地形なのか、活断層はあるのか等、土地の特性を認識しておくことをおすすめする。</p> <p>また、家族で防災についての話し合いをしていただき、避難場所や携帯電話不通時の相互の連絡方法などについて確認しておくことも重要であるし、非常時に持ち出すものを、日常使うものとは別に準備しておく必要がある。中でも、食料より大事なものは水である。1人1日2リットル、生活するために使う水は3リットルと言われているが、量販店で売っているペットボトルを家族分だけは準備しておいたほうが良い。</p> <p>東日本大震災では、200人以上の消防団員の方が亡くなり、民生委員の方も40人程亡くなったと聞いている。私はあの震災を受けて、自分の命が第一であると考えようになった。まず守るのは自分の命であり、次に困っている人を助けるのが順序である。命を守ることはすべてに優先する。自分が負傷したり、命を落としたら、家族や友人を誰も助けることができない。不用意に危険な行動をとらずに、必ず安全を最優先したうえで活動していただきたいと思う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>東日本大震災の体験談、教訓について、具体的にお話しいただいた。消防団員の災害時の役割・活動について考えさせられた。今後の防災活動を推進していく上で、参考にしていきたいと思う。</p>